

タイトル	1925年10月～1941年8月におけるSurréalismeの著作物の翻訳（および解説・注釈）
著者	秋元，裕子；AKIMOTO, Yuko
引用	年報新入文学(12)：157(081)-124(114)
発行日	2015-12-25

1925年10月～1941年8月における Surréalismeの著作物の 翻訳(および解説・注釈)

秋元 裕子

I. 1925年までのSurréalisme—ダダイズムとの決裂と、 言葉の定義を巡るキュビズムとの覇権争い

日本におけるSurréalisme関係の著作物翻訳について記す前に、フランスにおけるSurréalismeの前史を簡潔に述べる。

現在では、20世紀最大級の芸術運動の一つであると認識されているSurréalismeであるが、精神科の若き見習い医師であったアンドレ・ブルトン（1896～1966年）と、その親友ジャック・ヴァシェ（1895～1919年）との、第一次世界大戦の戦場における経験において、その種が撒かれたことが、周知の事実として挙げられる。とはいえ、それが芸術運動としてのダイナミズムを指向し始めたのは、1919年3月に、ブルトン、フィリップ・スーポー（1897～1990年）、ルイ・アラゴン（1897～1982年）による『^{リテラチュール}文学』誌の刊行からであろう。もっとも、当時彼らはトリスタン・ツァラ（1896～1963年）によるダダイズムに共感を示しており、1920年1月のツァラのパリ到着を待って、パリのダダイズム運動に参加していった。ブルトンらは、暫くの間、パリ・ダダの芸術活

動に没頭し、芸術運動としてのダダイズムを盛り立ていったものの、次第に彼らの芸術的傾向と、ツァラによるダダイズムのそれとの乖離が明らかになっていった。1921年5月には、国粋主義的傾向を示していた作家モーリス・パレス（1862～1923年）に対して批判的であったブルトンが、パレスを裁く舞台での擬似裁判で、ツァラと対立したことをきっかけとして、パリ・ダダの熱狂は終息に向かって行った。

その後、ダダイズムを超える新たな芸術運動を模索していたブルトンが、全ヨーロッパのアヴァンギャルド芸術諸派を集めてその方向性を見出そうと目論んだものの、ツァラとの対立が顕在化したことが手伝って、挫折に終わった。そして、ブルトンらとツァラとの決裂が決定的になったのは、1923年7月、ツァラの舞台公演（『『髭の生えた心臓』の夕べ』と題されていた）が、ブルトンらによって妨害され、ツァラの警察への通報によって、ブルトンらと警官が乱闘騒ぎを起こした事件による。

このように、ダダイズムに対する熱中の一時期と、それに対する反感・憎悪による大混乱を経て、ブルトンらは自らの芸術的方向性を見定めていった。すなわち、いわゆる無意識の世界の探求である。その方法としての自動記述は、既に1919年に、ブルトンとスーポーによって実践されており、ダダイズムとの蜜月期であった1920年に『磁場』という書物にまとめられていたが、24年には、グループ・メンバーによる集団実験が行われている。同年10月、ブルトンによる『シュールレアリスム宣言・溶ける魚』の刊行、および12月の『シュールレアリスム革命』誌（1924年～29年、全12巻）の発刊によって、Surréalismeは芸術運動としての態勢を整えて行った。日本で初めてのSurréalisme関係の翻訳が見られるのは1925年であるが、上記のような事情が逐一日本に報告されるはずもなく、したがって、ダダイズムとの関係性および芸術理念の相違について明確な情報がもたらされなかったゆえに、当然のよう

に、日本における初期の翻訳では、二つの芸術理念が混同されることが多かった。

一方、Surréalismeという言葉を巡って、ブルトンらとピエール・ルヴェルディー（1889～1960年）、イヴァン・ゴル（1891～1950年）等キュビズム系の詩人たちの間での争奪戦があったことも、日本におけるSurréalismeの導入において、その芸術理念の理解の上での混乱を導いた。周知のとおり、そもそも、Surréalisteという言葉は初めて使ったのは、ギョーム・アポリネール（1880～1918年）であり（1917年、「テレジアスの乳房」という戯曲を上演するに当たって、自らの作品の特徴をSurréalisteという言葉を使って説明している）、したがって、もともとその言葉は、主にアポリネールの芸術活動を特徴づけるために使われたが、やがて、いわゆるキュビズムの詩人たちの詩的理念を表わす言葉となっていった。ブルトンは、キュビズム系の詩人たちとの論争においてSurréalismeという言葉の意味を再定義し、彼の「Surréalisme宣言」（1924年）によって、この言葉の争奪戦に決着をつけたのだった。

ここまで述べたように、フランスのSurréalismeは、その芸術的發展と言葉の定義の上で複雑な背景を持っており、それらの経緯が紹介されないまま、ほぼ同時代的に日本に導入されている。いわば、この芸術運動の由来・全体像・方向性が見えぬ中での導入であり、それゆえの翻訳者の困難があったことは、想像に難くない。

II. 日本におけるSurréalisme関係の文献翻訳

本資料では、Surréalismeの詩が日本で初めて翻訳された1925年10月から、戦前において最後に翻訳された1941年8月（及び終戦後初めてのSurréalismeの文学作品の翻訳）までに亘る、Surréalismeの著作物（詩・エッセイ・シナリ

オ・評論批評等)の翻訳を掲載する。これは和田博文編『コレクション・日本シュールレアリスム(1)』(本の友社、2000年6月)の「年譜」を基礎にし、それを補足したものである。同書において詳細に書かれていなかった、個別の作品名(例えば「ポール・エリュアール二篇」と書かれている「二篇」の、具体的な作品名)に関しては、原資料を検証し、カッコ内に具体的な作品名を記して、「引用者註」と表記している。極力原資料を入手して検証したが、1929年10月『シネ』掲載「ポオルエリュアル詩章」(富士原清一訳)と1932年5月『文芸汎論』掲載「ポール・エリュアール二篇」(青柳瑞穂訳)に関しては原資料が入手できず、実際に検証できなかった。

作者・翻訳者・作品名・掲載誌(本)・掲載年月の順に表記し、単行本はゴシック体とする。

なお、それぞれの文献の解題は、『コレクション・日本シュールレアリスム(1)』を参照されたい。

*ルイ・アラゴン作、K訳「さてもゆかしき君よ—マルグリットに送る」『文党』、1925年10月。

コント形式のこの作品の後には、翻訳者「K生」によるアラゴンの紹介が付されている。そこでは「ネオ・ダダ」としてアンドレ・ブルトン、ジャック・ヴァシエ、アラゴンの名を挙げ、トリスタン・ツァラとの確執を仄めかしている。またアルフレッド・ジャリ、ポール・エリュアールについて、「追々紹介したく思う」と書かれている。

*イヴァン・ゴル作、西脇順三郎訳「恋歌」(イヴァンよりクレールへ)『三田文学』、1926年9月。

西脇によるものとしては初の超現実主義詩の翻訳が、キュビズム系の詩人ゴルのものであったことに注目したい。西脇はオックスフォード大学留

学後の帰国当初（1925年）より、ゴルとブルトンの、それぞれのSurréalismeを紹介していた（西脇順三郎「プロファヌス」『三田文学』復活号、1926年4月）。ゴルの「Surréalisme宣言」は、慶應義塾大学文学部教授西脇の教え子であった三浦孝之助によって翻訳された（『衣裳の太陽』1929年4月）。また、「恋歌」の「君は杏子の唇をもつたおれの牧場である」・「遠方の教会堂は君の心臓の中でおれのアンジェリスの鐘をたたく」・「君がものをいふとアカシアの樹に花が咲き」等の詩句は、西脇が三浦孝之助、中村喜久夫、佐藤朔、瀧口修造、上田保とともに編んだアンソロジー『馥郁タル火夫ヨ』（1927年12月）に発表した同名の詩作品の表現上のモチーフとなり、その詩的世界の形成に影響していると思われる。

*フィリップ・スーポー作、鈴木信太郎訳「手をあはせて」『辻馬車』、1926年11月。

*ポール・エリュアール作、中村喜久夫訳「練習（「あいてある門」・「河」）」『文芸耽美』、1927年3月。

*フィリップ・スーポー作、堀口大学訳「日曜日」『炬火』、1927年5月。

*ルイ・アラゴン作、UEDA訳「春の歴史」『文芸耽美』、1927年5月。

*ポール・エリュアール著、Ueda Tamotsu訳「GEORGES BRAQUE」『文芸耽美』、1927年5月。

*ルイ・アラゴン作、Ueda Tamotsu訳「血統の人間・肋骨」『文芸耽美』、1927年5月。

*ポール・エリュアール作、北川冬彦・三好達治訳「ポール・エリュアールの詩—現代仏蘭西詩抄—」（「花」・「他の人」附記にエリュアールに関する説明あり—引用者註）『亜』、1927年6月。

*フィリップ・スーポー作、北川冬彦・三好達治訳「フィリップ・スポオ二章」（「他処に—ポール・エリュアールに」・「日曜日」附記にスーポーに関する説

明あり一引用者註)『椎の木』、1927年7月。

ここでスーポーは、「エリュアール、ツアラ、アラゴン、ブルトンの友、最も純粹なる意味に於ける詩人とされてゐる」と紹介されている。

*アンドレ・ブルトン作、上田保訳「POISSON SOLUBLE」『文芸耽美』1927年7月。

上田はここで、「POISSON SOLUBLE」全32章のうち、第1章のみを翻訳している。しかし第1章全体ではなく、前から三分の一程度の部分しか翻訳していない。また、「溶解すべき魚」(「POISSON SOLUBLE」)の説明として、「アンドレ・ブルトン著『超現実派の宣言・溶解すべき魚』一九二四年発刊ノ後者ニヨルモノデアル」と述べている。よって、この時すでに上田がブルトンのSurréalisme宣言・「POISSON SOLUBLE」を入手して、読み込んでいたことがうかがえる。なお、はっきりした日時は不明であるが、1925、6年のある日、瀧口修造は西脇順三郎の書齋で、西脇が英国留学からの帰国の際に持ち帰った、ブルトンの『Manifeste du Surréalisme』を手にしており、それが瀧口とSurréalismeとの出会だったことを鑑みると、瀧口同様に西脇の教え子であり、西脇の持ち帰った学問・芸術に心酔していた上田保もまた、西脇経由で『Manifeste du Surréalisme』を実際に手に取ったことが推察できる。

*ポール・エリュアール作、上田保訳「あとに続くもの」・「舞踏のうちで」『文芸耽美』、1927年8月。

*ルイ・アラゴン作、上田保訳「三月の美麗なる麦酒」『文芸耽美』、1927年11月。

*ルイ・アラゴン作、Ueda Tamotsu訳「青色の夢」『文芸耽美』、1927年11月。

*ポール・エリュアール作、Ueda Tamotsu訳「VIVRE ICI」『薔薇・魔術・学説』、1927年12月。

*ミシェル・レリス著、Tamotsu Ueda訳「JOAN MIRO」『薔薇・魔術・学説』、

1927年12月。

* ポール・エリュアール作、Tamotsu Ueda 訳「CONSEQUENCE DES RÊVES」・「Les Dessous d'Une VIE ou la Pyramide Humaine」『薔薇・魔術・学説』、1928年1月。

* ルイ・アラゴン作、上田敏雄訳「TEXT SURREALISTE」『薔薇・魔術・学説』、1928年1月。

『詩と詩論』第一冊（1928年9月）において完訳。

* ルイ・アラゴン作、TAMOTSU UEDA 訳「POÈME DE CAPE ET D'ÉPÉE（頭布のある外套および剣の詩）」『薔薇・魔術・学説』、1928年1月。

* ポール・エリュアール作、TAMOTSU UEDA 訳「Les Cendres Vivantes」、『薔薇・魔術・学説』、1928年2月。

* ロートレアモン作、大野俊一訳「マルドロールの歌」『山繭』、1928年2月。

* ロートレアモン作、大野俊一訳「マルドロールの歌」『山繭』、1928年3月。

* フランツ・ロオ著、藤田暉訳「マックス・エルンストと接合的絵画」『山繭』、1928年3月。

* イヴァン・ゴル作、井汲越次訳「頌歌三章」（「巴里頌歌」・「伯林頌歌」・「倫敦頌歌」—引用者註）『山繭』、1928年4月。

* ルイ・アラゴン作、上田敏雄訳「Text Surréaliste」『詩と詩論』、1928年9月。

* ルイ・アラゴン著、Shuzo Takiguchi 訳「TRAITE DU STYLE」『衣裳の太陽』、1928年11月。

ここで翻訳されたのは、アラゴンによるテキストの前半部分であり、これは『詩と詩論』第四冊（1929年6月）に再録されている。また後半部分は『詩と詩論』第五冊（1929年9月）に掲載されている。

* ルイ・アラゴン作、TAMOTSU 訳「UNE SOLITUDE INFINIE」『衣裳の太陽』、1928年11月。

*ポール・エリュアール作、北川冬彦訳「ポオル・エリュアール 八章」(「花」・「夢の結果」・「同じく」・「怠惰」・「他の人」・「同じく」・「ダイヤの女王」—引用者註)『詩と詩論』、1928年12月。

『詩と詩論』第二冊(1928年12月)「後記」には、北川による「附紀」が掲載されている。それによると、ここで翻訳された詩篇はエリュアール「人生の下積み、或は人間のピラミッド」の中から訳出したものであり、「他の人」・「花」の二編は三好達治との共訳である旨が述べられている。ここで掲載された詩は、北川らによる同人誌『亜』(1927年6月)に掲載されたものの再録である。

*ルイ・アラゴン作、Ueda・上田敏雄訳「LA FAIM DE L'HOMME」『詩と詩論』、1928年12月。

*ルイ・アラゴン作、toshio訳「愛と接吻との接近等」『衣裳の太陽』1928年12月。

*ルイ・アラゴン作、Tamotsu訳「L'ILLUSION DE LA DESILLUSION」『衣裳の太陽』1928年12月。

*ルイ・アラゴン作、佐藤朔訳「DISCOURS DE L'IMAGINATION」『衣裳の太陽』、1929年2月。

*クレール・ゴル作、三浦孝之助訳「恋歌(クレールよりイヴアンへ)」『衣裳の太陽』、1929年2月。

*アンドレ・ブルトン著、佐藤朔訳「DADA二つの宣言書」『詩と詩論』、1929年3月。

*アンドレ・ブルトン著、春山行夫訳「現実の貧困についての序論」『詩と詩論』、1929年3月。

*バンジャマン・ペレ作、竹中郁訳「バンジャマン・ペレ詩抄」(詩集『LE GRAND JEU』より「年とつて悪魔は隠遁す」・「小さな二本の手」・「ビールの中の僕の手」を訳出—引用者註)『詩と詩論』1929年3月。

*ピエール・ルヴェルディ作、飯島正訳「ピエール・ルヴェルディ詩抄」（「風と精神」・「詩人」・「もつと遠くに」・「いつもひとりで」・「精神出立」・「冬」・「無感覚な男」・「御微行」・「天のスケイタア」・「太陽」・「薄暗い」—引用者註）『詩と詩論』、1929年3月。

*ジャン・コクトー著、堀辰雄訳「俗な神秘（ジオルジオ・デ・キリコ）間接的研究のエッセイ」『詩と詩論』、1929年3月。

*イヴァン・ゴル著、三浦孝之助訳「超現実主義の宣言書（1924）」『衣裳の太陽』、1929年4月。

ブルトンによる Surréalisme 宣言そのものの翻訳がなされたのは、『詩と詩論』第四、五冊（1929年6、9月）における北川冬彦訳が初である。しかし、ブルトンの Surréalisme 宣言よりも、ゴルの Surréalisme 宣言の方が、日本においては早くに訳出されていた。なお、北川よりも先に、ブルトンによる Surréalisme 宣言を部分的に引用して翻訳しているものについては次節（Ⅲ）において記す。

*ポール・エリュアール作、堀口大学訳「ポール・エリュワール二章」（「わたしのありか」・「僕が君に云ふことは」）『オルフェオン』1929年4月。

*ジャン・コクトー著、堀口大学訳「キリコ論」『オルフェオン』1929年4月。

*アンドレ・ブルトンおよびフィリップ・スーポー作、西脇得三郎・山中散生訳「GANTSBLANCS」『シネ』、1929年5月。

*ポール・エリュアール作、堀口大学訳「エリュワール二章」（「恋の女」・「裸にした真実」—引用者註）『オルフェオン』、1929年5月。

*イヴァン・ゴル作、飯島正訳「イヴァン・ゴル四篇」（副題「クレエルヘイヴァンより」）『オルフェオン』、1929年5月。

*フィリップ・スーポー著、堀口大学訳「ロオトレアモン」『オルフェオン』、1929年5月。

- *フィリップ・スーポー著、青柳瑞穂訳「ファルグと言葉」『オルフェオン』、1929年5月。
- *ルイ・アラゴン著、瀧口修造訳「スタイル論」『詩と詩論』、1929年6月。
瀧口翻訳によるアラゴン「スタイル論」と、北川翻訳によるブルトン「Surréalisme宣言」は、「現代の芸術と批評叢書」（厚生閣書店）の一冊として、それぞれ単行本として出版が計画されていた。『詩と詩論』第四冊（1929年6月）において「近刊」として広告されていることから、それがわかる。しかし、その計画は実現されなかった。
- *アンドレ・ブルトン著、北川冬彦訳「超現実主義宣言書」『詩と詩論』、1929年6月。
- *フィリップ・スーポー著、北川冬彦訳「ロオトレアモン」『詩と詩論』、1929年6月。
- *バンジャマン・ペレ作、富士原清一訳「J'IRAI VEUX-TU」『衣裳の太陽』、1929年7月。
- *バンジャマン・ペレ作、TIROU JAMAIN訳「MEMOIRES DE BEN JAMIN PERET」『シネ』、1929年7月。
- *ポール・エリュアール作、富士原清一訳「PETIT JUSTE」『シネ』、1929年7月。
- *アンドレ・ブルトンおよびフィリップ・スーポー作、西脇得三郎・山中散生訳「LA GLACESANS TAIN」『シネ』、1929年7月。
- *フィリップ・スーポー著、堀口大学訳「ロオトレアモン」『オルフェオン』、1929年7月。
- *フィリップ・スーポー著、堀口大学訳「ロオトレアモン」『オルフェオン』、1929年8月。
- *ルイ・アラゴン著、瀧口修造訳「スタイル論」『詩と詩論』、1929年9月。
- *アンドレ・ブルトン著、北川冬彦訳「超現実主義宣言書」10『詩と詩論』、

1929年9月。

*フィリップ・スーポー著、神原泰訳「ギーヨーム・アポリネール」『詩と詩論』、1929年9月。

*イヴァン・ゴル作、飯島正訳「イヴァン・ゴル詩抄」（「無線電話」・「日常生活の終り」・「アルプ小三部曲」・「クレエルへ」—引用者註）『詩と詩論』、1929年9月。

*フィリップ・スーポー著、堀口大学訳「ロオトレアモン」『オルフェオン』、1929年9月。

*ルイ・アラゴン作、上田敏雄訳「PROGRAMME」 「花束等信任の濫用（誤謬）」 「株式相場の変動」 『詩神』、1929年9月。

*バンジャマン・ペレ作、辻野久憲訳「早魃の歌」・「一等船客並びにその涼しさうな御顔付」・「二等船客並びにその髪の毛」 『詩神』、1929年9月。

*ポール・エリュアール作、富士原清一訳「ポオルエリュアル詩章」 『シネ』、1929年10月。

*ルイ・アラゴン作、飯島正訳「アラゴン五篇」（「近代風」・「象徴」・「老闘士」・「誇張」・「97-28」—引用者註）『オルフェオン』、1929年10月。

*フィリップ・スーポー作、堀口大学訳「ロオトレアモン」『オルフェオン』、1929年10月。

*アンドレ・ブルトンおよびフィリップ・スーポー作、北川冬彦訳「錫泥のない鏡」『オルフェオン』、1929年10月。

*アンドレ・ブルトン著、佐藤朔訳「ナジャ」『文学』（第一書房版—引用者註）、1929年10月。

内容の概略を言うと、『ナジャ』（1928年）は、ブルトンと「ナジャ」という女性の出会いに先立つ「一ダースほどのエピソード」、二人の出会いから短い恋愛期間を経て別れに至るまでの日記風の記述、「ナジャ」と

別れてからの、「ナジャ」及び「きみ」また「ぼく」に関する思索という三つの部分によって構成されている。そして、様々なエピソードを補足するものとして、写真図版が44点掲載されている。ここで佐藤が翻訳したのは、『ナジャ』全体の三分の一を占めるブルトンとナジャとの恋愛期間（10月4日から12日までの日付がつけられているが、1926年のことであるとみなされる）の、10月6日から8日までの期間の記述のみである。

- * フィリップ・スーポー作、北川冬彦訳「地平線」『詩神』、1929年11月。
- * ルイ・アラゴン著、瀧口修造訳「近世神話への序文」『詩と詩論』、1929年12月。
- * イヴァン・ゴル作、飯島正訳「イヴァン・ゴル詩抄」（「クレエルへ」—引用者註）『詩と詩論』、1929年12月。
- * フィリップ・スーポー作、堀辰雄訳「スウポオ詩抄」（「SAY IT WITH MUSIC」・「WESTWEGO」・「SWANEE」・「登攀」・「ルイ・アラゴンに」—引用者註）『詩と詩論』、1929年12月。
- * ポール・エリュアール作、富士原清一訳「ポール・エリュアル詩抄」（「賭博者」・「無二の」・「側に」・「どちら」・「完全」・「美しき正当等」・「第二の自然」—引用者註）『詩と詩論』、1929年12月。
- * イヴァン・ゴル作、飯島正訳「イヴァン・ゴル三篇」（「クレエルへ」—引用者註）『オルフェオン』、1929年12月。
- * フィリップ・スーポー著、堀口大学訳「ロオトレアモン」『オルフェオン』、1929年12月。
- * アンドレ・ブルトンおよびフィリップ・スーポー作、北川冬彦訳「垂幕」・「感情は科学である」・「人は喝采した」・「工場」『詩神』、1930年1月。
- * フィリップ・スーポー著、堀口大学訳「ロオトレアモン」『オルフェオン』、1930年2月。
- * ポール・エリュアール作、辻野久憲訳「野蛮な芸術」『文芸レビュー』、

1930年2月。

- *ルイ・アラゴン著、瀧口修造訳「発明者の影」『詩神』、1930年2月。
- *ピエール・ルヴェルディ作、飯島正訳「ルヴェルディ三篇」(「港」・「神秘の他の説明」・「世界の頭」—引用者註)『詩神』、1930年2月。
- *アンドレ・ブルトンおよびポール・エリュアール著、佐藤朔訳「ポエジイに関するノオト」『詩と詩論』、1930年3月。
- *アンドレ・ブルトン著、原研吉訳「超現実主義第2宣言書」『詩と詩論』、1930年3月。
- *ハンス・アルプ作、阪本越郎訳「アルプ詩抄『雲のポンプ』」『詩と詩論』、1930年3月。
- *ポール・エリュアール作、北川冬彦訳「生ける骨灰」『文学』(第一書房版—引用者註)、1930年3月。
- *フィリップ・スーポー著、半谷三郎訳「フランス文学は何処へ行く」『文芸レビュー』、1930年4月。
- *ポール・エリュアール作、辻野久憲訳「ポール・エリュアールの詩」(無題—引用者註)『詩神』、1930年4月。

エリュアールの詩集『愛・詩』(1929年)において、「II」とナンバーリングされた作品である。

- *ポール・エリュアール作、原研吉訳「舞踏の術」『詩神』、1930年5月。
- *アンドレ・ブルトン作、原研吉訳「溶ける魚(4)」『詩神』、1930年5月。
- *イヴァン・ゴル作、佐藤朔訳「詩の世界地図」『詩神』、1930年5月。
- *イヴァン・ゴル作、飯島正訳「くたばれ欧羅巴」『文芸レビュー』、1930年5月。
- *イヴァン・ゴル作、飯島正訳「無線電話」・「日常生活の終り」・「クレエルへ」『現代詩講座第八巻 現代世界詞華選』金星社、1930年5月。
- *ルイ・アラゴン作、辻野久憲訳「ゴビ二十八」・「詩法」・「難船信号」『現代

詩講座第八卷 現代世界詞華選』金星社、1930年5月。

*アンドレ・ブルトン作、佐藤朔訳（無題—引用者註）『現代詩講座第八卷 現代世界詞華選』金星社、1930年5月。

*フィリップ・スーポー作、北川冬彦訳「地平線」・「進行」・「私は偽る」『現代詩講座第八卷 現代世界詞華選』金星社、1930年5月。

*ポール・エリュアール作、北川冬彦訳「生ける骨灰」・「怠惰」・「花」・「他の人」・「同じく」『現代詩講座第八卷 現代世界詞華選』金星社、1930年5月。

*バンジャマン・ペレ作、淀野隆三訳「熱風警戒 ピカソに」・「雲」・「手足を縛つて」『現代詩講座第八卷 現代世界詞華選』金星社、1930年5月。

*アンドレ・ブルトン著、原研吉訳「超現実主義第2宣言書」『詩と詩論』、1930年6月。

この「第2宣言」の翻訳によって、史的唯物論および共産主義思想と Surréalisme との関係が強化され、中でもアラゴンの党派性が強調されていく。そのためか、1930年までアラゴンを盛んに翻訳していた瀧口修造も、以後はアラゴンの著作に関して、マックス・エルンストとサルヴァドール・ダリについて論じられた「侮蔑の絵画」の翻訳（1932年9月）しか行っていない。

「第2宣言」発表後 Surréalisme はグループ内で仲間割れを起し、分裂に向かっていった。というのも、1930年11月に、ソヴィエト連邦ウクライナ共和国の首都ハリコフで開催された、第二回国際革命作家会議に赴いたルイ・アラゴンとジュルジュ・サドゥールが、会議の執行部によって自己批判書への署名をさせられたからである。この自己批判書は、Surréalisme の理念を支えていたフロイト主義の原理を批判し、またブルトンによる「第二宣言」—いわゆる至上点（「生と死、現実的なものと想像上のもの、過去と未来、伝達可能なものと伝達不可能なもの、高いもの

と低いものが、そこからはもはや互いに矛盾したものとは感じられなくなるような精神の一点」、引用、ブルトン著、森本和夫訳「シュールレアリスム第二宣言」『シュールレアリスム宣言集』現代思潮社、1992年、90頁)の探求を目指して史的唯物論を支持し、その意味でマルクス主義への共感を確認した一を「観念論的すぎる」として否定するものであり、そしてブルトンが親近感を抱いていた、永続革命を目指すいわゆるトロツキズムと袂を分かち旨を宣言するものだった。

この自己批判書に対して、ブルトンらの不満が噴出したことによって、アラゴンとサドゥールは1932年にSurréalisme運動から離脱したが、その後アラゴンはいわゆる社会主義リアリズムへ接近していったのだった。

- *ピエール・ナヴィル著、北川冬彦・淀野隆三訳「文学とインテリゲンチヤ」『詩・現実』、1930年6月。
- *ポール・エリュアール著、山中散生訳「アルプ、マソン、エルンスト、キリコ」『シネ』、1930年6月。
- *フィリップ・スーポー作、西脇得三郎訳「地平線」『シネ』、1930年6月。
- *ポール・エリュアール作、辻野久憲訳「制定」・「我が恋の心に」『詩神』、1930年6月。
- *アンドレ・ブルトン著、瀧口修造訳『超現実主義と絵画』厚生閣書店、1930年6月。

Surréalismeの書物のうち、完訳され単行本として出版されたものは、この『超現実主義と絵画』が初めてである。戦前において、単行本はこの後、山中散生によって、1934年11月にアラゴン著『放縦』、1936年5月にブルトンとエリュアール共著の『童貞女懐胎』、1937年7月に同『ある一生の内幕或は人間の尖塔』がそれぞれ翻訳され、出版されている。

- *ルイ・アラゴン作、那須辰造訳「美しい伊太利女 パブロ・ピカソに」・「走

- 法]『L'ESPRIT NOUVEAU』(紀伊国屋版一引用者註)、1930年8月。
- *アンドレ・ブルトン他著、富士原清一訳「非 主義超現実主義者達に与ふ」(題の空欄は原文のママ一引用者註)『詩と詩論』、1930年9月。
 - *フィリップ・スーポー著、半谷三郎訳「フランス文学は何処へ行く」『詩と詩論』、1930年9月。
 - *ピエール・ルヴェルディ作、竹中郁訳「ピエール・ルヴェルディ詩抄」(「洋燈の傘」・「余の眼前の世界」・「季節」・「影」・「面前には」・「星だらけの空」・「午前」一引用者註)『詩と詩論』、1930年9月。
 - *イヴァン・ゴル作、笹沢美明訳「パナマ運河」『詩と詩論』、1930年9月。
 - *ルイ・アラゴン作、秦一郎訳「決意」『L'ESPRIT NOUVEAU』(紀伊国屋版一引用者註)、1930年10月。
 - *ポール・エリュアール作、瀬沼茂樹訳「彼女の服は」『L'ESPRIT NOUVEAU』(紀伊国屋版一引用者註)、1930年10月。
 - *フィリップ・スーポー著、翻訳者不明「ハリ・クロスビイに就いて」『AIR POCKET』、1930年10月。
 - *フィリップ・スーポー作、別府善次郎訳「水車場」『AIR POCKET』、1930年10月。
 - *フィリップ・スーポー著、堀口大学訳「ロオトレアモン」『詩・現実』、1930年12月。
 - *ルイ・アラゴン作、山中散生訳「半晶軸」『詩と詩論』、1931年1月。
 - *フィリップ・スーポー作、半谷三郎訳「工場」『文芸レビュー』、1931年1月。
 - *バンジャマン・ペレ作、瀧口修造訳「暗殺者フォシュの生涯」『詩神』、1931年1月。
 - *アンドレ・ブルトン、ルネ・シャルおよびポール・エリュアール作、瀧口修造訳「始めと終り／灌木林の学校」『詩神』、1931年1月。

*ロベール・デスノス著、中村喜久夫訳「シュルレアリスム第三宣言」『詩と詩論』、1931年3月。

ここで「ブルトンは革命といふ思想で生計を立てゝゐて、そして行為なんかはやらない人間のタイプだ」と述べられており、共産主義思想を巡る、当時のSurréalismeグループ・メンバーの「内紛」が明らかにされた。

*ポール・エリュアール作、富士原清一訳「観念のごとく」『L'ESPRIT NOUVEAU』（紀伊国屋版一引用者註）、1931年3月。

*ルイ・アラゴン著、瀧口修造訳「侮蔑の絵画」『絵画論研究』金星堂、1931年5月。

*ポール・エリュアールおよびバンジャマン・ペレ作、富士原清一訳「今日風の格言」『L'ESPRIT NOUVEAU』（紀伊国屋版一引用者註）、1931年7月。

*イヴァン・ゴル作、本多信訳「氷河」『セルパン』、1931年7月。

*ポール・エリュアール作、青柳瑞穂訳「魚」『セルパン』、1931年8月。

*ピエール・ルヴェルディ作、山内義雄訳「空しい数字」『詩と詩論』、1931年9月。

*ポール・エリュアール作、本多信訳「たそがれの浴女」（「飲む」・「たそがれの浴女」・「一人」・「SUITE」・「愛しき人」・「ならはし」一引用者註）『詩と詩論』、1931年12月。

*バーナード・コーストン著、森本忠訳「超現実主義者」『新文学研究』、1932年2月。

*ピエール・ルヴェルディ作、本多信訳「秘めたる対話」『文学』（厚生閣版一引用者註）、1932年3月。

*ポール・エリュアール作、青柳瑞穂訳「ポール・エリュアール二篇」『文芸汎論』、1932年5月。

*ハンス・アルプ著、瀧口修造訳「l'art abstraitに就て」『マダムブランシュ』、1932年5月。

- *ジョゼエ・デルテイユ著、青柳瑞穂訳「ダダイズムとシュールレアリスム」『樅の木』、1932年6月。
- *イヴァン・ゴル作、Cato訳「FINDU MONDE QUOTIDIENNE」・「Acacias」『海盤車』、1932年8月。
- *ルイ・アラゴン作、矢馬仲訳「仮死（散文詩）フランス ピカビアに」『海盤車』、1932年12月。
- *アンドレ・ブルトン著、瀧口修造訳「マックス・エルンスト論」『洋画研究』、1933年6月。
- *ポール・エリュアール作、瀧口修訳「詩の明証」『今日の文学』、1933年6月。
- *ポール・エリュアール作、翻訳者不明「遠近法」『MADAME BLANCHE』、1934年4月。
- *ポール・エリュアール著、山中散生訳「ボオドレエルの鏡」『HOMMAGE A PAUL ELUARD』海盤車刊行所、1934年7月。
- *アンドレ・ブルトンおよびポール・エリュアール著、山中散生訳「生まれつきの判断」『HOMMAGE A PAUL ELUARD』海盤車刊行所、1934年7月。
- *ルネ・シャール著、富士原清一訳「ポオル エリュアール」『HOMMAGE A PAUL ELUARD』海盤車刊行所、1934年7月。
- *ポール・エリュアール作、山内義雄訳「詩一篇（エリュアール）」（無題一引用者註）『青樹』、1934年9月。
- *ポール・エリュアール作、山中散生訳「お赦しあれ」『海盤車』、1934年9月。
- *ポール・エリュアール作、山中散生訳「真夜中頃」・「厭ふべき記憶」・「孤独圏より」『樅の木』、1934年9月。
- *アンドレ・ブルトン作、阿部保訳「宝石」『樅の木』、1934年9月。
- *フィリップ・スーポー著、富士原清一訳「美学者としてのボオドレエル」『L'ESPRIT NOUVEAU』（ボン書店版一引用者註）、1934年11月。

*ポール・エリュアール作、堀口大学訳「禁奢法」『L'ESPRIT NOUVEAU』（ボン書店版—引用者註）、1934年11月。

*ルイ・アラゴン著、山中散生訳『放縦』ボン書店、1934年11月。

『放縦』は、フランスにおいて1924年に刊行されたものであり、アラゴンがSurréalismeグループの一員であった当時のものである。既述のとおり、1934年当時のアラゴンは、共産党との関係を深め、「赤色戦線」などの詩によってブルトンを始めとする他のSurréalismeグループ・メンバーの間に亀裂が生じていた。

*フィリップ・スーポー著、富士原清一訳「美学者としてのボオドレエル（続稿）」『L'ESPRIT NOUVEAU』（ボン書店版—引用者註）、1934年12月。

*フィリップ・スーポー作、平川晷訳「日曜日」『L'ESPRIT NOUVEAU』（ボン書店版—引用者註）、1935年1月。

*フィリップ・スーポー著、花島克己訳「イジドオル・デュカス（コント・ドロオトレアモン）」『詩法』、1935年3月。

*サルヴァドール・ダリ著、瀧口修造訳「シュルレアリスムの実験に現はれた対象」『詩法』、1935年3月。

*バンジャマン・ペレ作、奈切哲夫訳「折らうか尖つた家と骨」『二〇世紀』、1935年4月。

*アンドレ・ブルトン著、山中散生訳「ブルトンの手紙」『詩法』、1935年5月。

*大島博光訳「スウルレアリストの抗議」『文芸汎論』、1935年8月。

*フィリップ・スーポー著、富士原清一訳「詩人としてのボオドレエル」『詩法』、1935年9月。

*イヴァン・ゴル作、堀口大学訳「馬來少女の歌へる」『セルパン』、1935年9月。

*ポール・エリュアール作、小林真一訳「LA FACILITÉ EN PERSONNE」『二〇世紀』、1935年10月。

*ポール・エリュアール作、山中散生訳「エリュアール詩鈔」(「X X」・「X X VI」・「X I」)『海盤車』、1936年1月。

エリュアールの詩集『愛・詩』(1929年)より訳出。

*ルイ・アラゴン著、翻訳者不明「リアリテへの復帰」『セルパン』、1936年5月。

*アンドレ・ブルトンおよびポール・エリュアール著、山中散生訳『童貞女受胎』ボン書店、1936年5月。

原著後半の短編6篇と、最終章を訳出している。このうち「恋愛」は、性行為の体位を表現したもので、当局検閲により即日発禁となるが、一部削除後販売許可される。また、原著にある「精神病者の精神状態の仮作」については、山中は全く無視しており、翻訳していない。

*サルヴァドール・ダリ著、瀧口修造訳「サルヴァドール・ダリと非合理性の絵画」『みづゑ』、1936年6月。

*イヴァン・ゴル作、堀口大学訳「馬來少女の歌へる」『文芸汎論』、1936年8月。

*イヴァン・ゴル作、堀口大学訳「馬來少女の歌へる」『蠟人形』、1936年8月。

*ルイ・アラゴン著、翻訳者不明「文化の擁護とスターリン憲法」『セルパン』、1936年9月。

*ルイ・アラゴン著、大島博光訳「ジヨン・ハートフィールドと革命美」『École de Tokio』、1936年9月。

*イヴァン・ゴル作、堀口大学訳「イヴァン・ゴル三篇」(「王者の道を」・「あたしは土地」・「あたしが誰だか」—引用者註)『詩洋』、1936年10月。

*トリスタン・ツァラ作、瀧口修造訳「夜の略説抄」『L'ÉCHANGE SURREALISTE』ボン書店、1936年9月。

山中散生『シュルレアリスム 資料と回想』(美術出版社、1971年6月)によると『L'ÉCHANGE SURREALISTE』は、1935年当初に出版計画が策定され、内容についてはブルトン、エリュアール両名と相談のうえ決めた

という。山中によると「シュルレアリスムの国際交流という視点から、この出版のもつ意義は大きかった」のだが、パリのSurréalismeが運動の国際化をはかっているちょうどその時期、『L'ÉCHANGE SURRÉALISTE』は「パリ本部の運動方針」に「期せずして順応した」。この本で取り上げられている「文化擁護作家大会に於ける講演」は、第三インターの指導下に1935年6月パリにおいて開かれた。ブルトン筆のこの講演文はエリュアールによって代読されたが、瀧口は『La Bête Noire』に掲載されたものを転載翻訳している。なお、『L'ÉCHANGE SURRÉALISTE』において、この講演文の他には、それぞれの作者の書き下ろしか未発表の近作を翻訳掲載している。それは、山中が翻訳したブルトンのエッセイ「シュルレアリスムの位置」、富士原清一訳による「当年十六歳の少女詩人」ジゼル・プラシノスの詩六篇、プラシノス作柳亮訳の詩「武装」、トリスタン・ツァラ作瀧口修造訳「『夜の略説』抄」、エリュアール作葦ノ原鶴蔵訳「L'ÉVIDENCE POÉTIQUE」、ハンジャマン・ペレ作山中散生訳「詩二篇」、瀧口修造作「七つの詩」であった。表紙の絵と構成は、下郷羊雄が担当している。山中散生は『シュルレアリスム 資料と回想』において、「本書の出版は、日本においてシュルレアリスムが受け入れられていることを、海外のシュルレアリストたちに知らせるのに、すくなくならず役立ったようである」と自負している。

- * アンドレ・ブルトン著、瀧口修造訳「文化擁護作家大会に於ける講演」『L'ÉCHANGE SURRÉALISTE』ボン書店、1936年9月。
- * アンドレ・ブルトン著、山中散生訳「シュルレアリスムの位置」『L'ÉCHANGE SURRÉALISTE』ボン書店、1936年9月。
- * ジゼル・プラシノス作、富士原清一訳「妹と仔牛」・「溶解」・「葡萄」・「大きな建物」・「敷物」・「それは草である」『L'ÉCHANGE SURRÉALISTE』ボン書

店、1936年9月。

- * ポール・エリュアール作、葦ノ澤鶴蔵訳「L'ÉVIDENCE POÉTIQUE」『L'ÉCHANGE SURREALISTE』ボン書店、1936年9月。
- * ジゼル・プラシノス作、柳亮訳「武装」『L'ÉCHANGE SURREALISTE』ボン書店、1936年9月。
- * バンジャマン・ペレ作、山中散生訳「ALLO もしもし」・「ATTENDRE 待つ」『L'ÉCHANGE SURREALISTE』ボン書店、1936年9月。
- * アンドレ・ブルトン著、瀧口修造訳「対象の予想されないデカルコマニーについて」『阿々土』、1936年12月。
- * イヴァン・ゴル作、堀口大学訳「馬來乙女の歌へる」『文芸汎論』、1937年1月。
- * ハーバード・リード著、翻訳者不明「超現実主義美術に於ける弁証法」『セルパン』、1937年1月。
- * イヴァン・ゴル作、堀口大学訳「馬來乙女の歌へる」『蠟人形』、1937年1月。
- * イリヤ・エレンブルク著、大島博光訳「スュウルレアリスト」『蠟人形』、1937年1月。
- * サルヴァドール・ダリ著、瀧口修造訳「ラファエル前派に現れた永遠の女性の亡霊的シュルレアリズム」『エコルド東京』、1937年1月。
- * サルヴァドール・ダリ著、山崎清・北園克衛訳「吾が要塞」『VOU』、1937年3月。
- * ルイ・アラゴン作、佐藤朔訳「美しき区域」『セルパン』、1937年3月。
- * フィリップ・スーポー作、大島博光訳「大海がある」『蠟人形』、1937年3月。
- * アンドレ・ブルトン著、瀧口修造訳「通底器—幻影物体」『新造型』、1937年3月。

ここでは『『妙屍体』の遊戯中にふとうかんだある物体の意義を、数日前に発見』したというブルトンのいわゆる「客観的偶然」体験が翻訳されているが、「客観的偶然」の体験と理論は、瀧口において重視されたとは

言い難い。

*アンドレ・ブルトン著「サンボリスムの曲線に沿ひて」『蠟人形』、1937年4月。

*サルヴァドール・ダリ作、瀧口修造訳「ババウオ」『シナリオ文学全集 第六巻 前衛シナリオ集』河出書房、1937年4月。

シナリオ「ババウオ」は、1932年の作である。映画化はされなかった。「ババウオ」は、この作品と同名の、主に映画批評を中心とした、ダリによる著書『ババウオ』（カイエ・リーブル社、1932年）に所収されている。山中散生『シュルレアリスム 資料と回想』（191頁）では、同書の図録に付けられた『ババウオ』という書物（図版107）の解説として、次のように述べられている。「サルバドール・ダリ『ババウオ』（一九三二年、パリ、カイエ・リーブル版、一五×二〇インチ、五八ページ、特製二三部、並製六〇〇部）の表紙、本書は、ルイス・ブニュエルとの共作『アンダルシアの犬』（一九二九年）同じく『黄金時代』（一九三〇年）に次ぐダリのシナリオ『ババウオ』のほか、彼独自の偏執狂的批判活動に裏づけられたエッセー『映画批評史概要』およびポルトガル・バレエ『ウィルヘルム・テル』を収載している」。

*アントナン・アルトー作、伊吹武彦訳「貝殻と牧師」『シナリオ文学全集 第六巻 前衛シナリオ集』河出書房、1937年4月。

『シナリオ文学全集 第六巻前衛シナリオ集』における内田岐三雄の「解説」によると、邦題『貝殻と僧侶』という映画は、「フランスで最初に作られた^{フィルム・シュルレアリスト}超現実主義映画」である。『貝殻と僧侶』（ジェルメーヌ・デュラック監督、アントナン・アルトー脚本、1926年）は、映画『ひとで』（マン・レイ監督、1928年）とともに輸入されたが、検閲に時間がかかり、1933年まで封切りされなかった。内田によると、「二作品とも画面欠如甚しく」、順序すら転倒し、「原作の意はとうてい伝えがたいもの」であったという。

この二つの映画に関しては1936年6月の『T映』（帝国美術学校映画研究会会報）において合評されていることから、この時点で上映されていたことがわかる。また、1937年10月7日発行の『科学ペン』臨時号「超現実主義映画特輯号」には、この二つの映画の解説と、『ひとで』に挿入されたロベール・デスノスの詩句が翻訳掲載されている。これは当時催されたと推定される「超現実主義映画の夕」上映会当日に配布されたものであると考えられる。さらに、1940年3月3日以降、「神戸詩人クラブ」中心メンバー七名が、次々検挙された所謂「神戸詩人事件」が起ったが、内務省警保局資料『昭和十五年中に於ける社会運動の状況』『共産主義運動』『第四、文化活動を中心とする運動の状況』・「六、神戸詩人クラブ関係事件の状況」によると、「神戸詩人クラブ」の「対大衆宣伝煽動活動」として「公用映画会を通じての大衆獲得闘争」が行われ、佃留雄・光本兼二の努力により、神戸大丸百貨店宣伝部に「シニールレアリズムの革命的性格を宣伝するに足るシニールレアリズム映画」が保管してあることを知り、1937年3月上旬、街頭で公開上映したという。上映されたものは、『アラン』（ロバート・フラハティ監督、1934年、原題「Man of Aran」）、『ひとで』、『貝殻と僧侶』であったという。

*ルイ・ブニュエルおよびサルヴァドール・ダリ作、内田岐三雄訳「アンダルシヤの犬」『シナリオ文学全集 第六巻 前衛シナリオ集』河出書房、1937年4月。

1929年、ルイス・ブニュエルとの共同脚本で映画化されている。プロローグの、女性の眼を剃刀の刃で横に切り裂く有名なシーンは衝撃的であるが、ダリはこの映画『アンダルシアの犬』によって、フランスのSurréalisteに認められ、その芸術運動に加わった。

なお、Surréalismeの映画シナリオに関してはこのように翻訳紹介され

ているが、この芸術運動のグループ・メンバーの戯曲に関しては、日本において紹介された形跡が認められない。パリ・ダダ末期には、ブルトン、スーポーによる「お気に召すなら」（1920年）、ブルトン、エリュアールによる「あなたは私を忘れるだろう」、アラゴンによる「ある晩の鏡付洋服だんす」（1923）などの戯曲が実際上演され、劇的創造とオートマティスムの混交、舞台と客席との熱狂的交流が行なわれていた。

- * ポール・エリュアール作、富士原清一訳「映像」『蠟人形』、1937年5月。
- * グラハム・ベル著、近藤東訳「ハアバアト・リイドの『シウルリアリズム』に就て、其他」『新領土』、1937年6月。
- * ルイ・アラゴン作、Oshima Hakko 訳「20-seiki」『蠟人形』、1937年6月。
- * ポール・エリュアール作、山中散生訳『或る一生の内幕或は人間の尖塔』春鳥会、1937年7月。
- * アンドレ・ブルトン著、大島博光訳「シュウルレアリスムの国境なき限界」『新領土』、1937年8月。
- * ルイ・アラゴン作、富士原清一訳「賛歌」『新領土』、1937年9月。
- * マックス・エルンスト著、瀧口修造訳「絵画と靈感」『美術時代』、1937年9月。
- * サルヴァドール・ダリ著、瀧口修造訳「ハリウッドの超現実主義（シウルレアリスム）」『新映画』、1937年9月。
- * ハーバート・リード著、岡橋佑訳「超現実主義の擁護」『新領土』、1937年10月。
- * ヒュー・サイクス・ディヴィス著、近藤東訳「超現実主義の共感者」『新領土』、1937年10月。
- * ハーバート・リード著、岡橋佑訳「超現実主義の擁護（2）」『新領土』、1937年11月。
- * ポール・エリュアール作、大島博光訳「持続」・「民衆の外に」『蠟人形』、1937年11月。

- *ハーバート・リード著、岡橋佑訳「超現実主義の擁護 (3)」『新領土』、1937年12月。
- *サルヴァドール・ダリ作、山中散生訳「腐つた驢馬」『みづゑ』、1937年12月。
- *モーリス・アンリ著、山崎清訳「シユウルレアリストの店グラデイパー 夢と現実を結ぶ橋の上に」『VOU』、1938年1月。
- *ポール・エリュアール作、大島博光訳「壁にぶつけられた頭」『蠟人形』、1938年1月。
- *ポール・エリュアール作、瀧口修造訳「描かれた言葉 パブロ・ピカソに捧ぐ」『阿々土』、1938年1月。
- *アンドレ・ブルトン著、瀧口修造訳「美は痙攣的であるだらう」『三田文学』、1938年2月。
- *I.A. リチャーズ著、原一郎訳「超現実主義を評す」『日本詩壇』、1938年3月。
- *ポール・エリュアール作、瀧口修造訳「自由な手」『みづゑ』、1938年3月。
- *ポール・エリュアール作、大島博光訳「過去への一瞥」『蠟人形』、1938年4月。
- *ポール・エリュアール作、山中散生訳「人間達とその動物達」(「魚・濡れた」・「牝牛」・「牝鶏」・「動物は笑ふ」・「蜘蛛」・「食べる」・「犬」一引用者註)『みづゑ』、1938年4月。
- *ポール・エリュアール作、仲泊良夫訳「Au Cœur de mon amour」『カルト・ブランシュ』、1938年5月。
- *イヴァン・ゴル作、堀口大学訳「イヴァン・ゴル三章」(「個人」・「自転車のり」・「不幸にも一妻に与ふ」一引用者註)『文芸汎論』、1938年5月。
- *パンジャマン・ペレ作、大島博光訳「自然は進歩を貪りくひ進歩を追ひこす」『蠟人形』、1938年5月。
- *サルヴァドール・ダリ著、瀧口修造訳「ナルシスの変貌」『みづゑ』、1938年6月。
- *フィリップ・スーポー作、大島博光訳「夜の方に」「悔恨のやうに」『蠟人形』、

- 1938年7月。
- * ポール・エリュアール著、仲泊良夫訳「Max Ernst」『カルト・ブランシュ』、1938年9月。
 - * ハンス・アルプ作、瀧口修造訳「エルンスト『博物誌』序」『みづゑ』、1938年9月。
 - * ポール・エリュアール著、訳者不明「最後の手紙 ローランド・ペンローズに」『夜の噴水』1938年11月。
 - * ポール・エリュアール作、堀口大学訳「既製品」・「孤独の宇宙」『文芸汎論』、1939年1月。
 - * ポール・エリュアール著、富岡宏資訳「MAX ERNST」『カルト・ブランシュ』、1939年2月。
 - * ジュール・シュペルヴェル作、堀口大学訳「牛乳の椀」『文芸汎論』、1939年2月。
 - * ルネ・マグリット作、瀧口修造訳「言葉と影像」『みづゑ』、1939年6月。
 - * アンドレ・ブルトンおよびポール・エリュアール著、堀口大学訳「詩に関するノオト」『文芸汎論』、1939年7月。
 - * アンドレ・ブルトンおよびポール・エリュアール著、堀口大学訳「詩に関するノオト」『文芸汎論』、1939年8月。
 - * アンドレ・ブルトンおよびポール・エリュアール著、堀口大学訳「詩に関するノオト」『文芸汎論』、1939年9月。
 - * バンジャマン・ペレ作、富岡宏資訳「血統と謹慎」『意匠』、1939年10月。
 - * バンジャマン・ペレ作、富岡宏資訳「コント」・「熱風にご注意—ピカソにささぐ」『カルト・ブランシュ』、1939年12月。
 - * イヴァン・ゴル作、堀口大学訳「眠る人々」『蠟人形』、1940年1月。
 - * フィリップ・スーポー作、堀口大学訳「スウポオ二章」（「日曜日」・「歌」—引用者註）『詩洋』、1940年2月。

- *アンドレ・ブルトンおよびポール・エリュアール著、堀口大学訳「詩に関するノオト」『文芸汎論』、1940年2月。
- *サルヴァドール・ダリ著、山中散生訳「サルヴァドール・ダリの手紙」『アトリエ』、1940年2月。
- *アンドレ・ブルトンおよびポール・エリュアール著、堀口大学訳「詩に関するノオト」『文芸汎論』、1940年3月。
- *アンドレ・ブルトンおよびポール・エリュアール著、堀口大学訳「詩に関するノオト」『文芸汎論』、1940年4月。
- *ポール・エリュアール作、山中散生訳「エリュアル詩抄」（「化粧」・「眼」・「夏」・「死」・「眠る人」—引用者註）『文芸汎論』、1940年4月。
- *ポール・エリュアール作、大島博光訳「正しき境域」『蠅人形』、1940年5月。
- *サルヴァドール・ダリ著、瀧口修造訳「真珠論」『アトリエ』、1940年7月。
- *ハンス・アルプ作、瀧口修造訳「果実達の大騒ぎ」『アトリエ』、1940年7月。
- *ポール・エリュアール作、瀧口修造訳「耐久の詩十一篇」（「無力の役割」・「ぱりおらあじゆ」・「大気のほか何ものもなし」・「影のない日々」・「最初の瞬間」・「嵐」・「悲劇の最初の幕と最後の幕」・「超え得ざるもの」・「神々」・「均衡」・「抛棄」—引用者註）『アトリエ』、1940年7月。
- *ポール・エリュアール作、大島博光訳「有用なる人間」・「脚」『蠅人形』、1940年8月。
- *ポール・エリュアール作、大島博光訳「ボオドレエルの鏡」『蠅人形』、1940年9月。
- *ポール・エリュアール作、大島博光訳「存在」『蠅人形』、1940年12月。
- *ポール・エリュアール作、大島博光訳「私は何処にゐるか?」『蠅人形』、1941年1月。
- *ポール・エリュアール作、大島博光訳「黄昏と疲労」・「悪しき言葉」『蠅人形』、

1941年2月。

*バンジャマン・ペレ作、富岡宏資訳「仮想的な病人」『カルト・ブランシュ』、
1941年3月。

*ポール・エリュアール作、大島博光訳「過去への一瞥」『蠟人形』、1941年3月。

*フィリップ・スーポー作、堀口大学訳「ジヨオルジア」『蠟人形』、1941年8月。

*アンドレ・ブルトン作、塚谷晃弘・泉倭雄訳「溶ける魚Ⅰ」『ルネサンス』、
1946年5月。

「POISSON SOLUBLE」全32章のうち第1章と第2章を翻訳掲載。

*アンドレ・ブルトン作、塚谷晃弘・泉倭雄訳「溶ける魚Ⅱ」『ルネサンス』、
1946年6月。

「POISSON SOLUBLE」より、第3章・第4章・第5章を翻訳掲載。

*アンドレ・ブルトン作、塚谷晃弘・泉倭雄訳「溶ける魚Ⅲ」『ルネサンス』、
1946年8月。

「POISSON SOLUBLE」より、第7章を翻訳掲載。ただし、『ルネサンス』
本号では、「6」とナンバーリングしてある。

Ⅲ. 「Surréalisme宣言」の翻訳状況（部分訳・抄訳・全文訳）

* 1927年5月（上田保「仏蘭西現代詩の傾向」『文芸耽美』）。

この評論で上田は『『超現実派の宣言』（Manifeste du surréalisme）』
に先立つものとして、ブルトンによって書かれた「超現実派の最初の宣
言」（実際は1922年11月発行の、『Littérature』誌掲載の「霊媒の登場」）
を抄訳し、ブルトンによる Surréalisme の定義を記した。その上田による
Surréalisme の定義の翻訳を引用する。「超現実派 (Surrealisme) ・吾々の
発明でなく、またより漠然たる批評の言語であるに止めることも出来たこ

の言葉は吾々によつて適確な意味に用ひられるようになった。その言語に対して 夢の状態(現在その境界を限定するに甚だ困難な夢の状態)に非常に相似する所の生理的自動性をあてはめることに吾々は同意した」。

* 1928年3月(瀧口修造「シュルレアリスムの詩論に就て」『創作月刊』)。

これは上田保による Surréalisme の定義の翻訳とは異なり、ブルトン『Manifeste du Surréalisme』(1924年)からの翻訳である。それを以下に引用する「シュルレアリスム。男性名詞。口頭或は文字その他凡ゆる方法に於て思想の真実な作用を現さんとする純粹な心理的自動性。凡て理性による統禦および美学上又は道徳上の凡ての先入主のなき、思想の dictée を謂ふ」。

* 1929年4月(イヴァン・ゴル著、三浦孝之助訳「超現実主義の宣言書(1924)」『衣裳の太陽』)。

本稿 I 節で述べたように、Surréalisme という語は、1917年6月24日にパリで初演された戯曲『ティレジアスの乳房』を、原作者ギヨーム・アポリネールが「Drame surréaliste」と命名したことに端を発している。1924年10月ブルトンによる『シュールレアリスム宣言』によって、以後 Surréalisme は言葉の定義の上で、ブルトン等のグループが正当性を所有するようになる。一方、イヴァン・ゴルもまた1924年10月雑誌『Surréalisme』(1号のみ)を創刊、ブルトンとは異なる「シュールレアリスム宣言」を執筆している。以下にその一部を引用する。「超現実主義は現代の一つの巨大なる運動である。それは健康を意味する、しかし何事か生起するすべてのところに発生する腐敗と病氣性の傾向を容易に撃退するだらう。(中略)而して或るダダ前派の人達が市民を駭かし続ける為に發明したる超現実主義のこの偽造物は直ちに流通外に置かれるだらう」。

* 1929年6月(アンドレ・ブルトン著、北川冬彦訳「超現実主義宣言書」お

よび原研吉「世界現代詩人レヴィユ アンンドレ・ブルトン」『詩と詩論』第四冊)。

原による Surréalisme の定義の翻訳を引用する。「シュルレアリスム、名男、口授、筆記、その他すべての様式を問はず、それに依つて思索の真の作用を表現しようとする純粹に神靈的なオトマチスム。理性によつて起こるすべての支配の欠除のなかの、すべての道徳的あるひは、審美的先入見の埒外にある、思索の書き取り」。

* 1929年9月(アンドレ・ブルトン著、北川冬彦訳「超現実主義宣言書(Ⅱ)」『詩と詩論』第五冊)。

1929年6月(第四冊)と9月(第五冊)の『詩と詩論』には、北川冬彦の訳でブルトンの『Manifeste du Surréalisme』(1924年)が掲載された。しかし、全訳には至らず、『Manifeste du Surréalisme』の冒頭部分と後半の一部分が抄訳されたにすぎなかった。また Surréalisme の定義部分に関しては、北川は完全に無視してしまった。

* 1930年3月(アンドレ・ブルトン著、原研吉訳「超現実主義第2宣言書」『詩と詩論』第七冊)。

* 1930年6月(アンドレ・ブルトン著、原研吉訳「超現実主義第2宣言書(2)」『詩と詩論』第八冊)。

1930年3月(第七冊)と6月(第八冊)の『詩と詩論』にはブルトン『Second Manifeste du Surréalisme』(1930年)が掲載された。「第1宣言」同様この「第2宣言」も、全訳に至らず、この宣言の前半部分がほぼ完全な形で抄訳されただけであった。

* 1931年3月(佐藤朔「シュルレアリスムの場合」『詩と詩論』第十一冊)。

佐藤はこの評論で、「第2宣言」を部分的に引用し、翻訳している。

* 1932年2月(瀧口修造「超現実主義の可能性と不可能性」『新潮』)。

瀧口はこの評論で「第1宣言」の要点を紹介し、「第2宣言」を部分的に引用して翻訳している。

ところで、フランス文学者稲田三吉によると（『シュールレアリスム宣言』現代思潮社、1961年初版の「解説」）、「シュールレアリスム宣言」の全訳は、稲田が訳した1961年刊行の「現代思潮社版によって、わが国ではじめて日の目を見る」ことができたという。また、同書瀧口修造の「刊行によせて」という文章では、「1930年にブルトンの『超現実主義と絵画』を訳した私も、宣言にはついに手が出せなかった」と述べられている。

戦後の翻訳状況は、以下のとおりである。

- * 1958年1月、『ユリイカ』誌上において、東野芳明がブルトン「第1宣言」（1924）・「第2宣言」（1930）を部分訳。
 - * 1961年、『シュールレアリスム宣言』（現代思潮社）において、稲田三吉が「第1宣言」・「第2宣言」・「第3宣言のための序論」（1942年）を完訳。
 - * 1970年、『アンドレ・ブルトン集成 第5巻』（人文書院）において、生田耕作が「第1宣言」・「第2宣言」・「第3宣言か否かのための序論」を完訳。
 - * 1974年、『シュールレアリスム宣言』（学芸書林）において、巖谷國士が「第1宣言」と「溶ける魚」（1924年）を完訳。
 - * 1975年、『シュールレアリスム宣言集』（現代思潮社）において、森本和夫が「第1宣言」・「第2宣言」・「第3宣言か否かのための序論」を完訳。「宣言の再版への序文」（1929年）・「第2宣言の再版への緒言」（1946年）も付す。
 - * 1983年、『シュールレアリスム宣言集』（白水社）において、江原順が「第1宣言」・「第2宣言」・「第3宣言を書くか否か的前提的序文」を完訳。
- 以上が日本における「Surréalisme宣言」の翻訳状況である。

〈付記〉

この資料を作成するに当たって、千葉宣一氏より、以下の原本の御提供を賜わった。これらの貴重な蔵書によって、本資料において詳細に提示できた情報や新たに付け加えられた情報が、多数に及んだことを、心から感謝申し上げたい。

*『アトリエ 超現実主義研究号』、1930年1月。

*『現代詩講座第八巻』金星社、1930年5月。

*山中散生編『HOMMAGE A PAUL ELUARD』海盤車刊行所、1934年7月。

この『HOMMAGE A PAUL ELUARD』は、山中が発行していた同人誌『海盤車』（1932年1月～1937年11月、全24号）の、第3巻第14号に該当するものである。山中散生『シュルレアリスム 資料と回想』によると、「海外シュルレアリスト」の中で山中が最初に知己を得たのはエリュアールであり、山中が1933年に、エリュアールの作品の翻訳権を得る目的でエリュアールに直接手紙を送ったことが契機となって彼らの交流は始まった。この山中の手紙に対して、折り返しエリュアールから署名入りの近影と翻訳許諾の旨の返事が届き、その後ブルトン、エリュアール共著の『処女懐胎』（『童貞女受胎』と同じ）、ダリの『目に見える女』、シャルの『アルチューヌ』他数点の図書及び美術写真雑誌『ミノートル』第1号などが山中の元に送られてきたのだった。その後山中とエリュアールとの文通は「急速に頻度を加え」ていったのだが、この『HOMMAGE A PAUL ELUARD』というエリュアールに捧げられたアンソロジーは、このような山中とエリュアールとの「交友関係の緊密さの中から生まれるべくして生まれた」のだった。

*山中散生編『L'ÉCHANGE SURREALISTE』ボン書店、1936年9月。

- *『みづゑ 海外超現実主義作品集』、1937年5月。
- *『アトリエ 前衛絵画批判と研究』、1937年6月。
- *『科学ペン 特輯超現実主義』、1938年6月。
- *瀧口修造『ダリ』アトリエ社、1939年1月。
- *福沢一郎『エルンスト』アトリエ社、1939年7月。

(あきもと ゆうこ・北海学園大学非常勤講師)